

粉川寺

ワキ 粉川寺の住僧

ヲカシ 能力

シテ 杉村弾正少弼

立衆 随行者

子方 梅夜叉

トモ 杉村の従者

地は 紀伊

季は 雑

ワキ詞

「是は紀州粉川寺の住僧にて候。さても当寺に於て。年に二夜旅人に宿を貸さぬ大法にて候。其一夜が今夜に相当りて候ふ程に。此由を申し付けばやと存じ候。いかに能力。」

ヲカシ

「御前に候。」

ワキ

「汝存じの如く。当寺に於て年に二夜旅人をとめぬ夜の候。一夜が今夜に相当りて候ふ程に。かまひて人を寺中にとめ候ふな。其分心得候へ。」

次第

「其暁を松風や。く。高野の寺に参らん。」

シテ詞

「かやうに候ふものは。都方のものにて候。さても我多年の望みにて候ふ間。紀州高野山に参り候。それより粉川寺へも参らばやと存じ候。」

サシ

「都出で、今日瓶の原と詠めける。木津のこつ川は是れかとよ。川風あまり身にしめば。我にも衣を鹿背山に。思ひつゞけて行く程に。」

シテ

「さて奈良坂に着きしかば。こゝは法華般若寺。」

立衆

「大聖文珠を拝み申せば。さいしやうはつき雲井坂。
左はいづく東大寺。三国無双の大伽藍。まのあた
りに拝む有難さよ。」

下歌

「月の三笠の山の端は。今ぞ知らるゝ春日野の。鹿
の音になどか附けざらん。」

上歌

「春ならば。花とやいはん葛城の。く。よそに見
えたる峰の雲。かゝる旅こそ宇野と聞け。猶行く
先はあふかの里。此あたりぞと夕煙。立ち添ふ林

を見渡せば。かせいちの森やかまやどの。森とも
はやく知られけり。く。

シテ詞

「急ぎ候ふ程に。粉川の寺に着きて候。やがて御堂
へ参らうずるにて候。いかに誰かある。」

トモ

「御前に候。」

シテ

「はや日の暮れて候ふ程に。寺中に宿を借りて来り
候へ。」

トモ

「畏つて候。いかに案内申し候。」

ヲカシ「誰にて渡り候ふぞ。

トモ「是は旅の者にて候ふが。一夜の宿を借り申したく候。

ヲカシ「此寺の習ひにて。年に二夜旅人に御宿参らせぬ大法にて候。其一夜が今夜に相当りて候ふ間。御宿はかなひ候ふまじ。

トモ「寺中へ御宿の事を尋ねて候へば。当寺の大法にて年に二夜旅人に御宿参らせず候。其一夜が今夜に

相当りて候ふ程に。何方にも御宿は叶ふまじき由申し候。

シテ「其義ならば苦しからず候。今夜は月も面白く候ふ間。本堂の前の白砂にて一夜を明かさうずるにて候。皆々近うよりて物語り候へ。

子「あら痛はしや旅人の。いまだ御宿もなげに候。是れ御覧候へ。

トモ「いかに申し候。只今幼き人の御通り候ふが。御文

を落し申されて候。

シテ「何と少人の文を落し給ひたると申すか。殊に当寺は児観音にて候ふ程に。若し御利生の事もや候ふらん。先づ披いて見うずるにて候。いまだ御目にかゝりたる事は候はねども。旅に行き暮れ疲れ給ひたる御有様。余りに御痛はしく存じ。一筆申し参らせ候。みづからが古郷は近江の国高島と申し候。其かたよりと仰せ候ひて御尋ね候はゞ。御坊

も対面あるべし。みづからも左様にあひしらひ申すべし。我名は梅夜叉と申し候。返すぐも御いたはしさの余りにかやうに思ひよりて候。

地「やさしの人の心や。いつ馴れぬ花の姿の。色あらはれて此宿の。かりごとぞ嬉しき。たぐひな人の心や。

シテ詞「さて何とし候ふべき。

トモ「其御事にて候。只今御越なくは。梅夜叉御の御志

も徒らになり候ふ間。仮名字にて御出あれかしと
存じ候。

シテ「さらば其由申し候へ。

トモ「畏つて候。いかに案内申し候。高島殿の御宿坊は
いづくにて候ふぞ。

ヲカシ「是にて候。

トモ「高島殿の只今御登山にて候。

ヲカシ「其由申さうずるにて候。いかに申し上げ候。高島

殿御登山にて候。

ワキ「何と高島殿の御登山と候ふや。あら思ひよらずや。

此方へと申し候へ。

ヲカシ「畏つて候。此方へ御出で候へ。

トモ「心得申し候。いかに申し候。其旨申して候へば。
あれに御通りあれとの御事にて候。

シテ「さらばかう参らうずるにて候。

ワキ「御登山めでたう候。

シテ「さん候とくにも登山いたし御礼申すべきを。公私ひまなきに付いて遅なはり申し候。殊に幼きものを参らせ置き。万づ御むつかしき事恐れ入り存じ候。

ワキ「委細承り候。只今の御登山祝着申し候。いかに梅夜又殿此方へ御出で候へ。殊の外の成人にて候。

シテ「誠に殊の外成人仕りて候。

ワキ「又梅夜又殿御舎兄は比叡山に御童形にて候ふか。

御出家を遂げらるゝとも申す。又御下りあつて家を御相続とも申し候ふが。何れか一定にて候ふぞ。

シテ「さん候いでそれは。

子「あら心なの仰やな。しばし休ませ申すべきに。

地「長物語よしぞなき。明けなば帰る古里の。遠旅も痛はしやと。みづから酌を取り。御客人にすゝむる。

シテ「げにや情は有明の。

地

「月の都に住みなれて。人こそ多けれど。かゝるやさしき事はなし。京に田舎あり。田舎にも又都人の。心ざまはあるべしや。道すがらの思出。げに忘れがたの風情や。

トモ詞

「はや鳥が歌ひて候。

シテ詞

「何とはや夜の明方に候ふとや。さらば御暇申さうずるにて候。

ワキ

「暫く。たまゝの御登山にて候ふ程に。御逗留候

ひて御慰み候へ。

シテ

「御意にて候ふ程に逗留申したく候へども。路次に人と堅く契約申したる事候ふ間。先づ此度は罷り歸り。又近日罷り下り御礼申すべく候。

ワキ

「さては御立ちなうては叶ひ候ふまじきか。あら是非もなや候。重ねて御登山を待ち申さうずるにて候。いかに梅夜又殿。はや御かへり候御門送り候へ。

子 「心得申し候。

シテ 「いかに申し候。さても今夜は草の枕に臥すべく候
ふ処に。御憐みにより一夜を明かせ給ふ事。生々
世々忘れ申すまじく候。必ず十日の内には罷り下
り。今夜の御礼申すべし。さるにても昨日の暮の
隠し文。

地 「思はぬ方に節竹の。一夜の契り夢うつゝ。粉川の寺
の鐘の声鳥の音。あら忘れがたの面影や。

シテ 詞 「いかに誰かある。某が参りたる由申し候へ。

トモ 「畏つて候。いかに御坊へ案内申し候。

ヲカシ 「誰にて渡り候ふぞ。

トモ 「高島殿の御登山にて候。

ヲカシ 「いかに申し上げ候。又高島殿御登山にて候。

ワキ 「此方へ入れ申し候へ。あらめでたや御下りにて候。

シテ 「先度の御礼のため参りて候。さて幼き人は何処に
御座候ふぞ。

ワキ 「是に渡り候。

シテ 「情は人の為めならず。

地 「よしなき人に馴れ初めて。 出でし都も。 忍ばれぬ
程になりにけり。

ワキ詞

「重ねて御登山祝着申し候。 以前は仮名字にて御出
のよし承り候。 此度は誠の御名字を御名乗り候へ。

シテ

「仮名字に付きて面白き曲舞の候ふ程に歌ひ。 其時
名のり候ふべし。

サシ

「吉野山の花見の行幸には。 妹脊の中を離れ。

地

「須磨明石の月に休らふとても。 三年の日数を徒ら
に過し。 其後筑紫筑前に下り。 朝倉の里といふ処
に。 暫く御座をなし給ふ。

クセ

「茆茨根を切らず。 さいてん削らずして。 黒木に作
る宮柱。 立つ木の枝もおのづから。 すなほになれ
ば君が代に。 住む事やすき例とて。 其まゝ住ませ
給ひしかば。 それより名づけつゝ。 木の丸殿と号

すなり。世につゝむべき事あり。たゞ人の如く天皇や。豊の明りの影すごく。忍びて住ませ給ひしに。参る人は必ず。其名を名のり帰るべしと。綸言の趣。和歌の浦波朝倉や。

シテ
「木の丸殿に我居れば。

地
「名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ。かやうに詠じ給ひしかば。其後参る人は。言問はづ名のりけり。げにやかしこき世語りの。遠き喩へも恐れあり。

我等もいざや名乗りつゝ。名のりの為めと木綿附の。とりあへぬ御酒盛。いざ歌ひ奏で遊ばん。

ロンギ地

「げに面白やさこそげに。都人の舞の袖。ゆかしやと囃せば。

シテ

「たをやかなりし舞の手も。今は老木の花ぞ無き。御覧あれやかたぐ。

地

「若木によらぬ舞の袖。老木の花はめづらしや。

シテ

「さらば思出に。幼き人と諸ともに。相舞ならば舞

はうよ。

地 「げに相舞は殊更。互の心花染の。

シテ 「恐れある御袖を。引きたつる袂も。

地 「引かるゝ袖もたをやかに。ゆたかなる君が代なり。

歌ひ奏で舞人の。さもめでたくぞ覚ゆる。

シテ 「いつか紀の路の山高み。

地 「雲こそつゞけ旅の空。（舞）

ワキ詞 「なふく此度は実名を早く御名のり候へ。

シテ 「今は何をかつゝむべき。是こそ杉村弾正の少弼候
よ。

ワキ 「あらおびたゝしの大人や候。

シテ 「さても幼き人の御事を。我君へ申し上げ候へば。
急ぎ御供仕れとの御事により。只今御迎ひに参り
て候。

ワキ 「さては幼き人只今が名残にて候ふよ。

シテ 「中々の事。忘れぬ時忍べとや浜千鳥。

地 「ゆくへも知らぬ。

シテ 「人を尋ねて。

地 「月の夕暮花の曙。 事によせ折々ごとに。 忘るまじ
や忘らるまじの。 あらまし残す。 有りし情は露の
玉づさ。 言葉も尽せぬ名残かな。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第六輯』大和田建樹 著